

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4271300404		
法人名	有限会社よしおか		
事業所名	グループホームあじさいの家		
所在地	長崎県諫早市飯盛町後田1643-1		
自己評価作成日	平成 31 年 3 月 4 日	評価結果市町村受理日	平成 31年 3月 28日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/42/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ローカルネット日本評価支援機構
所在地	長崎県島原市南柏野町3118-1
訪問調査日	平成 31年 3月 15日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

ご利用者が安心して暮らせる様な、家庭的な雰囲気づくり、衛生的な環境づくりに努めています。ご利用者とご家族のニーズに応じたサービスが提供出来る様、柔軟な業務改善を行ったり、介護技術の向上に努めています。ご利用者からは、「ここのご飯はとても美味しい」と好評です。皆さん、笑顔で仲良く暮らしておられます。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

当ホームは周囲を山々に囲まれた閑静な場所に立地し、開設から16年を迎えた。「ゆとりある心で、自分らしく、皆仲良くすごしましょう」という理念を掲げ、職員は入居者・家族との関係性を深めながら専門性の高い関わりがなされている。職員は一日の生活状況が把握できるよう24時間シートに毎日の出来事を記録し、その方の日課の理解を深めている。また、ひもときシートを活用することで介助者中心になりがちな思考を本人中心の思考に転換する取り組みを実践するなど、入居者の課題やその方の気持ちに沿った対応に真摯に向き合っている。ホームは代表者が地域住民であることから地域との繋がりも深く、入居者や家族と近い距離感で関わりを持っていることが最大の特徴と言える。あじさいの花々のように、その方らしく年齢を重ねる毎に深みを増す入居者が大きながくのように寄り集まり、笑顔が多い団らんの中で過ごす姿に、今後ますます期待の持てる事業所と言える。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

ユニット名
グループホーム あじさいの家

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	職員全員が理念の実現へ向け、利用者一人一人が今までの生活を維持できる様努めている。ミーティング時、理念を掘り下げて話し合っている。	ホームは入居者や家族との関わりを深め、入居者にとっての「自分らしさ」を理解するとともに、入居者それぞれの過去の生き方や考え方を家族とともに振り返っている。入居者への対応方法については職員間で共通理解が図られており、その方が笑顔で暮らせる方法や考え方の方向性を話し合いながら理念の実践や浸透に向けて取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会の総会、清掃などの行事には参加している。又一人暮らしの方に配る町の弁当作りにも参加している。ホームのイベントがある時などは地域に声掛けをしている。	代表者が地元の住民であることから、ホームは地域との繋がりが深く、地域の子も達や近隣住民が気軽に足を運ぶなど良好な関係性が構築されている。ホームは地域の防災訓練や社会福祉協議会・民生委員の活動に賛同し、地域の高齢者世帯への弁当作りに参加する等、地域の一員としての活動意欲を高く持った積極的な関わりがなされている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	ホーム夏祭りに地域の方を招き介護教室を行っている。(認知症寸劇、介護用品の紹介等)		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	サービス提供の取り組みを参加者へ報告し、意見等を頂いている。会議の議題として、外部評価の結果を報告している。	運営推進会議には民生委員・地域包括支援センター職員・近隣の特別養護老人ホーム職員など、地域住民の出席が多い。会議ではホームの現状を伝えるとともに、地域についての説明を受けるなど双方向的な話し合いがなされている。今年度はハザードマップをもとに土砂災害時の具体的な対応について参加者と意見交換を行い、避難場所や一時避難後の対応の検討を行っている。ホームは参加者の意見や要望に真摯に向き合っており、有意義な会議となっていることが窺える。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議に毎回参加していただいているので意見を聞くことができる。	代表者は長年介護業務に携わっていることから社会福祉協議会所長や特別養護老人ホーム施設長との関わりが深く、今年度は地域のひとり暮らし高齢者の暮らしを支える一員として意見交換を行っている。グループホーム連絡協議会の役員としても活動しており、諫早市開催の高齢者福祉の会議にて専門的な観点から意見を述べるなど、地域の現状にどう対応していくのか計画の策定に向けて協力的な姿勢で関わりを持っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	玄関は施錠していない。居室も施錠はしていない。又、30年度の介護報酬の改定に伴い、事業所としての指針を明確にし、ミーティングを利用し勉強会を行っている。	ホームでは運営推進会議の開催毎に身体拘束委員会を開催しており、ホームの現状や取り組みについて報告がなされている。今回、介護報酬の改定に伴い身体拘束指針の再整備を行っており、職員間で拘束についての考え方や具体的な対応方法の振り返りを行った。ホームでは職員間で常に話し合いの機会を持つとともに、支援内容が不適切なケアに繋がっていないか高い意識を持って関わるよう取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待の芽チェックリストのアンケートを行い、各職員が振り返りを行った。今後も定期的に行う様にしている。入浴時等は、利用者の身体観察を行いあざなどが見られたら原因の究明に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護に関しての情報は職員にもわかるように話す機会があれば説明をしている。対応が必要な入居者様は現在おられない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には、職員二人体制を取り利用者、家族の不安や疑問を尋ね十分な説明を行う様努めている。事業所で出来る事、出来ない事、家族の協力も必要な事や起こりうるリスクの説明を行い同意を得ている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者や家族のニーズに合わせた支援が出来る様に家族と密に連絡を取り、担当者会議をまめに行っている。利用者担当職員を配置し、家族へ紹介をしている。運営推進会議には、必ず1回は出席して頂いている。	ホームは家族に入居者のケアの一端を担うパートナーとなっただき、時間の都合がつかない範囲内での面会や運営推進会議等への出席を依頼している。入居者の生活の変化についてはこまめに家族へ報告し、現状の理解を促している。ホームだけでは対応が難しい部分については家族へ協力を依頼しながら、その方にとって一番良い方法をともに考え解決する姿勢で関わりが持たれている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	ミーティング時、に各係の職員に一人ずつ意見を言ってもらうように促している。毎日の申し送りの時を利用して業務に関する提案などがあれば述べられるようにしている。	代表者及び管理者は職員の主体性を大事にし、職員がそれぞれにホーム運営における役割を担いながら意見を言える環境の構築に取り組んでいる。ホームは職員一人ひとりが同じレベルで介護ができることを目指しており、経験が浅い職員もゆとりを持って介護ができるよう課題や原因を話し合っている。また、業務の時間配分やスタッフの配置を常に検討しながらホーム運営に取り組んでいる。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修には、職員が希望すれば参加できる様シフトの調整や費用の援助を行っている。研修内容は、報告書を通して職員間で共有出来る様にしている。新人職員に対しては、最低でもひと月は指導者が付き、介護技術、認知症について学んでもらっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	諫早グループホーム連絡協議会に所属しており、研修会や、他施設との交流会に参加している。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前には、訪問面談を行い、ご本人の要望をうかがうようにしている。入居に心配を持たれている方には、体験入居を設けている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	事前面談にて、困っておられる事や要望等をうかがう様に努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	サービスを導入する際は、必ずサービス担当者会議を開催し、必要な支援ができる様努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	家事(洗濯物干し、たたみ、掃除)等、職員と一緒にやっている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族が面会に来られた際、利用者本人がとても喜んでおられた事や、日々の会話等あじさい便り等で家族に伝えるようにしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	地元の神社に初詣に出かけたり、自宅近辺へドライブに出かけたりしている。そこで顔見知りの方から声をかけて頂くこともある。	職員は入居者の声に耳を傾け、家族や行き慣れた思い出の場所等本人がこれまで大事にしてきた関係性が途切れないよう努めている。自宅や以前住んでいた地域への個別での外出支援を行い入居者の心を和ませているほか、家族の面会時には入居者と家族と一緒に居室でゆっくりと過ごしていただけるよう配慮している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	孤立される方が無いよう、職員が介入し皆さん仲良くされている。帰宅願望、見当識障害等で不穏になる方がおられるが、入居者同士声掛けを行っておられる。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	地元の方が多いため、ご家族とばったりお会いする機会も多くその後の様子等うかがっている。また、転居された施設へ面会に行き様子うかがうこともある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	アセスメントを十分に行い本人の希望、意向の把握に努めている。	職員は入居者と関わりを多く持つことでその方を知り、一日の生活状況が把握できるよう24時間シートに毎日の出来事を記録し、その方の日課の理解を深めている。また、その方のニーズに合わせた日課を書式化することで職員の共通認識に繋げ、日常生活動作の「できること」「してほしいこと」を明確にすることで入居者のその方らしい暮らしの実現に向けて取り組んでいる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用者本人、家族から十分な情報収集を行い、職員ミーティングの際に全職員に周知している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者の変化に応じ、全職員でアセスメントを行うようにしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	利用者の現状の課題、解決に向けて、本人、家族と十分に話し合い、要望に応じた介護計画を作成している。	ホームでは半年毎にケアプランの計画内容が現状に沿っているか確認を行い、家族と介護方針を確認しながらその方に合った計画を立案している。職員はその方が現状を維持するためにどう働きかけるのか、その方が目標達成に向けて気分良く取り組んでもらえるにはどうしたらいいのか、家族と話し合いながら職員間で検討し取り組んでいる。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	利用者の様子を個別記録に記入し、変化があった際は職員ミーティングを開き、全職員で再アセスメント、介護計画の見直しを行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者の状態や、一人一人のニーズに応じたサービスが提供できるように業務改善を行っている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	さわやか相談員の受け入れを行い、利用者の相談や話を聞いて頂いている。出かけて行く事が困難な利用者の方は、近所の理美容院の訪問理容を利用している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用者、家族が希望している医療機関を聞いている。又、毎月の定期受診は職員が同行し、その結果を担当者会議や面会の時に家族に報告している。	ホームは入居者や家族の意向を尊重し、入居時にはかかりつけ医を継続受診するか、ホーム協力医への変更も可能であることを説明し対応している。職員は入居者の体調の変化に敏感に反応し、主治医の指示を仰ぐとともに家族と治療方針の共有を図りながら入居者が自分らしい生活が継続できるよう努めている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職の配置はないが、ホームかかりつけ医が近所のクリニックで利用者の状態を把握して頂いているので、気軽に相談できる。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入退院時は、情報提供書で情報交換を行っている。又、早期退院に向けても、電話等で情報交換を行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時の契約の際や家族会、サービス担当者会議等、機会あるごとに話し合いを行っている。当ホームは看取りをしない方針である為、利用者、家族が困る事がないよう取り組んでいる。	ホームでは看取りを行わない方針を入居時に家族へ示し、重度化した際はケアの方針を家族と共有しながら入居者が医療的な処置の比重が多くなる限度まで、食事に変化をつけ、できる範囲をホームで対応している。医療的な対応が必要となった場合には他事業所へ移り住む方も多く、主治医と家族、ホームと一緒に悩み考えながら、その方が一番落ち着くことのできる次の移り住みの検討に努めている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	ミーティング時に、急変、事故の対応をマニュアルに沿って話し合いをしている。救急車を依頼する際も、緊急時カードを作成し備えている。心肺蘇生法等の訓練も行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を日常的に防火管理及び消火、避難訓練等を実施することにより、全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。 また、火災等を未然に防ぐための対策をしている	火災避難訓練については、自主訓練を年2回、消防署指導訓練を年1回必ず実施している。地震、水害の災害対応マニュアルについては、作成中である。非常食品については、賞味期限を記入し保管している。	ホームでは作成した避難訓練計画書をもとに、入居者を安全に避難誘導できるよう訓練を行っている。現在、地域住民を含めた訓練の実施はなされていないが、有事の際は一時避難場所として道向かいの空地を利用することや、地域の消防団への声掛けなど協力の要請がなされている。今年度はハザードマップをもとに地域の過去の風水害状況を確認するとともに、地域の消防訓練に参加するなど、地域の防災意識を高く持って災害対策に取り組んでいる。	現在、ホームが土砂災害警戒エリアであることから、自治会長や民生委員の意見を聞き、避難経路や一時避難場所の再検討がなされた。そこでの話し合いの結果をもとに防災計画書を策定中であり、災害発生を想定した訓練はなされていない現状にある。マニュアルの再整備とともに実効性の高い訓練を行い、有事の際に具体的などう行動すべきか周知することが望まれる。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	職員ミーティングの際に、利用者に対する声掛け(接遇)について常に話し合っている。	職員は介助を行う際、相手がわかるように同意を得てから行うようにしており、行動障害等で介助を受け入れていただけない場合には言葉の掛け方などを職員で検討し、その方の理解に努めている。今年度は「ひもときシート」を活用し、職員中心になりがちな思考を入居者本人中心の思考に転換し、その方がどんな方なのか理解する難しさを学んだ。昨年末には自己チェックシートで接遇の振り返りを行っており、高い意識で関わりが持たれている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	毎日の生活の中で、利用者が今求めている事や実際の声を日誌に記入し、その都度希望に応じる様にしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者一人一人の行きたい所、したい事をうかがい、できるだけ実施する様にしている。又、利用者のペースに合わせた対応を心がけている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	利用者の生活習慣に合わせて支援を行っている。又、自己決定が困難な場合は、その都度職員が本人の気持ちをうかがいながら支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	季節に応じ流しそうめん、焼き芋、バーベキューを行っている。又、行事等(家族会、敬老会、忘年会等々)の際には、食べたい物のアンケートを行い利用者が食べたい物を提供している。	ホームでは入居者の関係性を考慮し、落ち着いて食べられる席の配置や入居者が自ら食事を口に運べるよう食器や食材の彩りに工夫がなされている。食事は嚥下や咀嚼機能が維持できるよう歯ごたえを大事にしており、全てをミキサーにかけけるのではなく、食材によって柔らかいものをほぐしながら対応する等、視覚から食欲を促す対応もなされている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者全員の一日の摂取量を業務日誌に記入し把握している。又、食が細くなった利用者については、高カロリー食品と併用し本人が好きな物を提供している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	嚥下、咀嚼機能低下予防として、昼食前に口腔体操を行っている。毎食後、口腔ケアの声掛けを行い職員が付き添ったり、必要に応じ介助を行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	利用者全員の排泄パターンをチェックしてできるだけ失禁が無い様心掛けている。	ホームでは入居者の自立を意識した関わりを持ち、定期的に入居者の心身の状態をアセスメントしながら介助が必要な部分と自分で排泄できる環境の整備に努めている。起居動作が不安定な入居者についてもできるだけ見守りに対応し、個々の排泄リズムを把握しながら声掛けや排泄の兆候を見過ごさず、羞恥心への対応にも意識を持った関わりがなされている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日の体操、レクで身体を動かすと共に、こまめな水分補給に努めている。又、毎朝、ヤクルトを提供している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入居前に、当ホームの入浴日と時間帯を説明し本人の要望をうかがいできるだけ要望に応じられる様努めている。	職員は職員毎の入浴の手順の差異をなくすようマニュアルを整備し、入居者の特性によって異なる対応方法についても職員間で共通理解を図りながらケアの統一がなされている。介護拒否がある入居者には介助を受け入れてもらえるよう関わり方を検討し、入居者が負担なく寛いで入浴できるよう支援に努めている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	その時の状態に合わせて、居室で静養して頂いている。但し、寝たきりや、身体レベル低下、昼夜逆転にならない様、又、日中楽しく過ごせる様に利用者が好む個々のアクティビティを行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬マニュアルを作成し、全職員へ周知し服薬ミスが無い様取り組んでいる。又、利用者全員、毎日のバイタルを記入し、受診時、主治医に報告し指示に従っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	入居時、できるだけ自宅と同じ様な生活ができる様な環境作りに努めている。又、利用者の生活歴の中で行っていた趣味等を個別ケアとして取り入れ一緒に行える様支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	利用者の希望に合わせ、馴染みの場所、地域へでかける様にしている。家族の協力が必要な時は、相談し協力を得ながら支援している。	職員は日常的に入居者が外に行きたい気持ちを大事にし、入居者同士で軽食やランチを一緒に楽しむなどその方の思いに沿った支援ができるよう努めている。ホーム行事として出掛ける際には家族へ声掛けを行い、目的地で一緒に過ごすきっかけづくりも担っている。入居者のホーム外へ向けられた意識を職員は大事に汲み取り、出掛けることが楽しみとなるよう工夫がなされている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	利用者が買いたいものがある際には、家族と相談している。又、近くの商店へ一緒に行き好きな物を買える様にしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話の使用は自由に行って頂いている。相手の方とやり取りができる様支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者が居心地の良い空間である様に、日付、場所の名称を掲示したり、季節感が感じられる物を利用者全員で作成し掲示している。行動障害がある利用者については、ひもときシートを活用し、その利用者の不快と感じる原因を全職員で検討し改善している。	ホームでは装飾品や家具は家庭に近いものを準備しており、共用空間は職員の丁寧な手入れによって清潔で気持ちの良い空間となっている。床暖房によって入居者の足元は暖かく、入居者は居心地の良い席を入居者自らが選びながら、入居者同士が繋がり、活動意欲を高めながら生活できるよう配慮がなされている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	玄関前にソファを設置し、一人で過ごしたり仲の良い利用者同士がくつろげるスペースがある。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	出来るだけ自宅居室と同じ様な環境になる様、本人、家族と相談しながら環境作りに努めている。	居室には自宅で使い慣れた家具や手回り品の持ち込みがあり、馴染みの物に囲まれた入居者にとって居心地の良い空間が準備されている。室内は入居者本人の心身の状態によって、家族や本人と相談しながら家具の高さや向きが調整され、入居者の手の届く範囲に手回り品を据えることによってご自分で生活しているという意識が維持できるよう検討されている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者の状態に合わせて安全に過ごせる様、居室、共用空間の環境整備を行っている。(立位保持バー、トイレの場所の掲示等)		